

ドイツ文学におけるクリスマス

木田綾子*

Christmas in German literature

Ayako KIDA*

In German literature, Christmas scenes are often depicted impressively. Christmas time may play an important role as a main theme in a story, or it can be a scene of a long work.

How Christmas is depicted depends on the work, and varies with the times, however, what is expressed there has something in common: nostalgia and happy memories of childhood. The German writer Goethe had already written these in his own literature in the 18th century. A Christmas tree, which was becoming popular in Germany at that time, is so impressive in his earlier work “The Sorrows of Young Werther”. The bright tree and children contrasts with the sad ending in the novel. Here is a kind of archetype that orients the Christmas scene in subsequent 19th-century literature.

Christmas scenes are bright and brilliant, with Christmas trees, spicy sweets and gifts. There is an image of happy children. Therefore, it plays a role not only in emphasizing the misfortunes that may occur in characters in literature, and but also in contrasting social issues in the 19th century.

1. はじめに

ドイツ文学には、クリスマスの場面が印象的に描かれることが少なくない。クリスマスという時期が主要なテーマとして扱われることもあれば、長い作品の一場面として扱われることもある。クリスマスの描かれ方は作品によってそれぞれに異なり、時代によって微妙な変化も見受けられるが、そこには共通して、幼少期の幸せな記憶や郷愁が現れている。

ドイツを代表する作家ゲーテは、クリスマスの場面を文学の中にいち早く取り入れた。1774年に発表された『若きヴェルターへの悩み』には、当時ドイツ特有の風習であったクリスマスツリーの様子が印象的に描かれている。ここには、その後の19世紀の文学に描かれるクリスマスの場面を方向付ける原型のようなものがある。

本論は、まず、19世紀を代表する作品の中でクリスマスがどのように描かれているのかを例として示す。次にゲーテの『若きヴェルターへの悩み』において、クリスマスの場面が作品の中でいかに効果的に用いられたのかを検証する。加えて、

クリスマスツリーを飾るなど、ドイツから広まった風習が、文学においても重要な役割を果たしていることを明らかにする。

2. 19世紀の文学に描かれるクリスマス

アーダルベルト・シュティフターの代表作『水晶』(1845/1853)は、クリスマスイヴからクリスマスにかけて幼い兄妹が雪山に迷い込み、奇跡的に生還した、小さな村の事件が扱われている。その冒頭は、以下のようにドイツのクリスマスの様子が一ページ以上丁寧に描かれるところから始まる。

教会の一ばん美しい祝祭の一つは、冬のさなかまぢかに行われる。それは、夜がとう長く、昼がとう短くといっている時期で、太陽は、私たちの畑地に一番斜めにさし、雪は野原を残りなくおおっている。つまり、クリスマスの祭りなのである。[中略] 教会での、そういう

式とともに、家々でも、クリスマスの祝いが行われる〔中略〕そのことは生涯を通じて影響をおよぼしてゆく、そして人それぞれの生の暮れ方になってからも、その印象は、もの悲しい思い出や、心のふるえる思い出の中に、いわば過去のみがえりとして、色とりどりに光る翼をはためかせながら、わびしくうつろな夜空を天がけることが多いのである。⁽¹⁾

ここには、ドイツの田舎の人びとが、村の教会や家庭でクリスマスを祝う敬虔な様子が現れている。幼い兄妹の直面した困難な事件はクリスマスの日に起きた。死と隣り合わせの恐ろしい自然が描かれながらも、氷の山や満天の星は美しく、その中で賢明に二人は生き延びる。やがて村人たちに見つけられ、教会の鐘が鳴り響く。クリスマスに神様に祝福された二人は、静かな村のクリスマスの出来事として、今後語り継がれていくことが想像できよう。

クリスマスが物語の舞台として設定されている有名な作品は、他にもホフマンの『くるみ割り人形とねずみの王様』(1816)が挙げられるだろう。シュティフターよりも少し前の作品である。こちらも幼い兄妹が登場する。シュタールバウム家の末の娘マリーがクリスマスプレゼントとして選んだ不恰好なくくるみ割り人形にまつわる不思議な物語である。人形が動いたりしゃべったり、ドロッセルマイヤーおじさんの語るおとぎ話の内容、マリーの見た夢、そして目覚めた後に起きる出来事との境界線があいまいだったり、幾分ファンタジーの要素が強い。後にチャイコフスキーがバレエ音楽として作曲した『くるみ割り人形』としても知られている。ホフマンは、明るく、きらびやかなクリスマスツリーの様子を以下のように描いている。

部屋の中央の大きなモミのクリスマス・ツリーには、たくさん金の銀の玉がついており、アーモンドの砂糖づけや色とりどりのボンボンやその他の結構なお菓子が、どの枝からもまるで蕾か花のようにのぞいているのでした。しかしこのクリスマス・ツリーでもっとも美しいものとしてほめられるのは、その枝のかげに星のようにきらめいている何百という小さなロウソクと、キラキラ光りながら、子供たちに、さあ、わたしの花と実を採りなさいと誘っているその木自身です。⁽²⁾

マリーは、このきらきらしたクリスマスツリーの下に、くるみ割り人形を見つける。クリスマスに奇跡が起きるという点は、ホフマンを愛読したシュティフターの作品にも共通するだろう。

クリスマスは、しかしながら、奇跡やきらびやかな面だけではない。19世紀も半ばになると、クリスマスの負の部分があらわになる。ゲオルク・ビューヒナーは、1836年両親に宛てた手紙の中で次のように報告している。

クリスマスマーケットから帰ってきた。どこもぼろをま

とった、震えている子供たちの山だ。彼らは、見開いた目と悲しい顔で、水と粉、ごみと金の紙でできたすばらしいもの前に立っていた。多くの人にとってはみずばらしい楽しみと喜びが、手の届かない高価なものでもあるという考えが、僕をととも辛い気持ちにさせる。⁽³⁾

明るいクリスマスの影に潜む貧困に目を向けたのは、シュトルムである。彼はクリスマスの言及が比較的多く、『クリスマスの詩』という有名な詩も残している。初期の短編『みずうみ』(1849)では、クリスマスが印象的に描かれている。物語は、老人が幼い頃を回想する形で進められる。クリスマスの場面は、幼馴染のラインハルトとエリーザベトが空間的に離れ、気持ちがずれ始める位置にある。ラインハルトは進学のため故郷を離れている。クリスマスの前夜、彼は仲間と酒場にいる際、クリスマスのプレゼントが届いたことを知らされる。急いで帰宅すると、部屋の中はクリスマスのビスケットの甘い香りに包まれている。ラインハルトは懐かしさがこみ上げ、震える手で明かりを点ける。この瞬間、エリーザベトや家族と過ごした故郷のクリスマスが彼の脳裏を過ったことが推測されよう。しかし、ここではクリスマスが単なる郷愁として描かれるだけではない。酒場で騒ぐ学生がいる一方で、ジプシーの少女は、一人、悲しい詩を歌っている。これも19世紀におけるクリスマスの一つの場面である。

シュトルムの作品には、『みずうみ』の他にもクリスマスが描かれていることが多い。『マルテと時計』は、時計を話し相手に孤独に暮らしている未婚の女性の話である。マルテは10年前に母を亡くしてからは、一人でクリスマスイヴを過ごしてきたが、その年は妹の家族と過ごす予定だった。しかし、幼少からマルテを見守ってきた時計が、「行ってはいけない」と言っているように感じ、部屋でクリスマスの思い出に浸ることにする。マルテはまず、子供時代に家族と過ごした楽しいクリスマスを思う。次に母が亡くなった10年前のイヴの真夜中を思い出す。母は時計が見守る中、静かに息を引き取った。

この短編では、クリスマスを背景に描くことにより、マルテの孤独な人生が浮き彫りにされている。読書や思索をし、時々調子の狂う時計の面倒を見ながら生きている老女にとって、家族と過ごした思い出は支えでもある。

ろうそくの灯されたクリスマスツリーはテーブルにない。それは裕福な人たちだけのもの。でもその代わり、二本の長くて大きなろうそくの明かりが灯っている。⁽⁴⁾

クリスマスに関する数々の記述からは、この行事を歓迎しながらも、一方で時代の問題点を見ずにはいらなかったシュトルムの社会に対する批判的なまなざしが伺える。

20世紀の始まりの年に出版された長編小説『ブッデンブローク家の人びと』(1901)は、トーマス・マンの処女作であり、副題に付されているように、「ある一家の没落」が描かれている。

19世紀のリューベックの豪商ブッデンブローク家の四代にわたる変遷が描かれている本作品におけるクリスマスの描写には、一家の繁栄が現れている。クリスマスの場面が最初に描かれるのは、作品の前半、二代目ヨハンの頃である。娘のアントーニエがまだ幼く、一家は隆盛を誇っていた。皆が歌を歌い、部屋には豪華なクリスマスツリーが飾られ、テーブルにはプレゼントが並んでいる。遅い夜の食事では、鯉や詰め物をした七面鳥が、食べきれないほど出された。⁵⁾ こうしたクリスマスの様子は、アントーニエの幸福な少女時代の思い出となった。

クリスマスを盛大に祝うことができたのは、二代目の妻ブッデンブローク老婦人が亡くなる前のクリスマスまでである。老婦人は亡くなった夫が続けていたクリスマスのプログラムを全力で守ろうとする。ここにはまだ力の残っている一家の、人の集まるクリスマスが描かれてはいるが、にぎやかな音の合間に訪れる静かさの中に、やがて近づく一家の不幸が予感されるだろう。

翌年、老婦人が亡くなった後のクリスマスは、それまで必死に守られてきたプログラムが無視され、家族だけの小規模な会となる。さらにその翌年はクリスマスの場面すら描かれず、年が明ける場面となる。一家の繁栄を表す場面としては、他にも豪華な家を建てたり、大きな商会のパーティーを開いたりといくつか見られるが、毎年訪れるクリスマスを描くことによって、一家の盛衰は歴然とする。

3. ゲーテ『若きヴェルターの悩み』に描かれるクリスマス

クリスマスを作品の中にいち早く取り入れたのはゲーテである。とりわけ、代表作『若きヴェルターの悩み』(1774)⁶⁾には、クリスマスツリーとクリスマスを待つ子供たちの様子が効果的に描かれている。

本作品は三つの部分から構成され、編者がヴェルターの残した手紙を収集し、これをまとめたという設定が採られた、いわゆる書簡体小説である。第一部と第二部はヴェルターの手紙のみで構成されているが、編者は作品冒頭でヴェルターの「悲しい運命」について言及して以降、第三部で初めて読者の前に現れる。編者は、ヴェルターが手紙を宛てる友人、ヴィルヘルムではない。何者であるか明確には示されていない。ヴェルターの自殺に心を動かされた第三者と思われる。ヴェルターの手紙を整理したこの第三者が存在することで、ヴェルターの不安定な内面が安定した形で読者に示されている。

ヴェルターが自殺に至るまでに起きた外的な事柄、例えば、若い農夫の犯した殺人事件、ヴェルター不在のときのアルベルトとロッテの状況など、説明を要する内容は、ヴェルターの手紙だけでは読者に伝えることができない。自殺という悲しい考えに慣れ親しむようになってきたヴェルターは、手紙の書き出しと思われる日付のないメモを残すことも多くなり、こうしたメモには解説が付けられている。手紙を書くことが

困難になったヴェルターに代わって、読者に分かりやすく物語を進行させるには、便宜上編者が必要だった。

クリスマスの場面は、この第三部において編者により報告される。クリスマス前の日曜日、死を決意したような手紙を友人ヴィルヘルムに送った後、ヴェルターはロッテを訪ねる。その際のロッテの様子は以下のように描かれる。

ロッテはおもちゃを整理しているところだった。小さな弟妹たちのクリスマスの贈り物を準備していたのである。ヴェルターは、子供たちは喜ぶでしょうと言った。そして、思いがけずドアが開いて、ろうそくや砂糖菓子、りんごで飾りつけられたクリスマスツリーが現れると、天国にいるようにうっとりとなった幼年時代について語った。(219)

編者の報告は穏やかで、幼年時代が明るく印象的に描かれている。ところが、クリスマスイヴまで来ないと約束したヴェルターが現れたため、約束を守らなかったヴェルターを、ロッテはなじる。「このままではいけない」(219)というロッテの拒絶の言葉に、ヴェルターは死の決意をさらに固くする。

この後、ヴェルターはロッテの父を訪ねるが不在だった。代わりにヴェルターに懐いていたロッテの弟妹たちが歓迎する。彼らはヴェルターに飛びついたり、追い回したりして静かにさせてはくれない。子供たちは想像力を働かせて、クリスマスの贈り物の話しを始める。ヴェルターはいたたまれず立ち去る。

「子供とクリスマス」の明るい様子が描かれることで、既に死を決意しているヴェルターの絶望との対比が強調されると同時に、ヴェルターの死を知らされる運命にある周囲の人の戸惑いと悲しみが予感される。この効果については、前もって説明されている。ロッテと知り合ったときの舞踏会で天候が悪化し、雷が鳴ったときのことを、ヴェルターはこう記している。

楽しみの最中に不幸なことや恐ろしいことに見舞われると、そうでない場合よりも強い印象を与えられるものだ。(51)

書簡体小説という形で物語が展開されて行く中で強く押し出されるものは、ヴェルターの内面である。ヴェルターは、絵を描き、文学を読む多感な青年である。作品において、絵を描く際に観察する自然の体験や、折に触れて読んだり話題にしたりする読書の体験に、ヴェルターの内面が現れるのである。同時に、この内面描写が他者との関係においても現れている。すなわち、ヴェルターを取り巻く人間関係や出来事などに対する判断、周囲の風景に対する受けとめ方に、彼の内面が表出しているのである。これより、読者は彼の心のありようとその変化を窺うことができる。そのような内面表出に、書簡体小説であることの必然性がある。⁷⁾

ヴェルターが他者との関わりにおいて、彼の内面がポジテ

イブに表出していた一例として子供たちが挙げられよう。彼は子供たちに親しまれ、「この世で僕の心に一番近いのは子供だ。」(61)と自分にとって子供が最も近い存在であると考えていた。子供に対する賛辞は、ヴェルターが明るく美しい自然を前にしたときと同じである。ヴェルターが関心を持っているのは、とりわけ、村からやってくる子供たちの「激しい感情や、欲求を無邪気に爆発させること」(33)である。子供たちは「自然の表出」を妨げない性質を有しており、ヴェルターの基本姿勢に合致する。新しい土地に到着したばかりの五月は、子供たちに自分の内面が表出していた。しかし、クリスマスを待つ無邪気な子供たちを前にしても、ヴェルターは彼らに自らの内なる自然を知覚することはない。もはや、彼の内面は明るい対象と一体にはなれないのである。

4. クリスマスツリーの文化史

クリスマスに関する研究はドイツに限らず盛んであり、その風習の由来もある程度解明されてはいるが、いずれも確実とは言い難く、研究の途上である。ただし、クリスマスツリーを飾る習慣がドイツから広まったというのは確かと言えそう。

クリスマスを祝う習慣は、もともと異教の祭りと結び付けられていた。キリストの誕生日を巡る議論は、紆余曲折を経て12月25日に定着するが、これは異教の太陽崇拝とキリスト崇拝を統合しようとしたコンスタンティヌス帝の影響が大きい。当時ローマ帝国では、太陽を崇拝するミトラス教が普及し、その主祭日が冬至に当たる12月25日だった。彼は異教的な精神や習慣をキリスト教の中に取り込み、融合させることを試みた。キリスト教の組織力を利用して帝国の統一に役立てようとしたのである。

また、北ヨーロッパでは、12月25日に冬至祭を行う習慣があった。これと結びつけることで、キリスト教が北方にも広まったとされている。

現在のようにクリスマスツリーを飾る習慣のはじまりは、若木や若枝で家々を飾りつける習慣のあったゲルマン民族の冬至祭と関係しているというのが一般的な見方である。4世紀、シリアの教父エラスムスの記述によると、冬至祭の際、家々が花輪で飾られていたという。中世には様々な枝や樹木を立てて祝うようになった。モミの木が使われるようになったのは、異教の風習をキリスト教に取り込む作戦だったと言われている。モミの木は三角形に見えるため、キリスト教の伝道師が三位一体を説くのに都合が良かった。ただし、16世紀頃まではこれを「異教的な」習慣とし、反対する聖職者も多かった。

モミの木を飾る習慣に関しては、いくつか記録が残っており、いずれもドイツ内のものである。中でも1419年、フライブルクの記録が古い。パン職人の信心会が聖霊救貧院にリンゴ、洋梨、オブラート、レープクーヘン、色を塗ったナッツ、金紙などの紙飾りを付けたツリーを飾った。また、今日のように賑やかに飾り付けをしたツリーの古い記録は、シュトラ

ースブルクにもある。1605年、ある人物がシュトラースブルクについて書いた日記には、「シュトラースブルクで目にした珍しいもの」と題して、りんごや砂糖菓子で飾られたツリーに関する記述がある。

17世紀頃の劇にも記録がある。これは、キリスト教と密接な関係がある。その頃、特にライン地方で聖夜にキリストの降誕劇と並んで、アダムとエヴァの楽園における墮罪の劇が行われていた。この楽園の劇の際にりんごを飾った木が使われ、クリスマスツリーと結び付けられたとされている。こうして、モミの木には、りんごと並んでホステア(聖餐式のパン)が飾られるようになり、家庭に浸透する中で、他の様々なものも一緒に飾られるようになった。

ドイツ国内でクリスマスツリーが広まったのは、宗教改革者マルティン・ルターの影響も大きい。偶像崇拝を否定するルターは、それに代わるシンボルとして、ツリーを提唱したとされる。また、ツリーに最初に蠟燭を灯したのはルターとする説もあるが、これは伝説の域を出ない。ろうそくを付ける習慣に関しては、17世紀後半のハノーヴァーで体験したことについて、18世紀初頭に記述したオルレアン大公妃の手紙に記録されている。これによると、ハノーヴァーの学校劇の中で、テーブルに置かれたツゲの枝にろうそくが立っていたという。この頃、クリスマスツリーの習慣をフランスに導入しようとしたが、定着しなかった。クリスマスツリーをフランスで最初に飾ったのは、1840年、オルレアン公爵と結婚したドイツ・メクレンブルクの王女だった。クリスマスツリーは、異教の習慣とキリスト教が密接に関連し合い、まずは、王侯貴族の間に広まり、やがて民衆の間に広まることになる。

家族と祝うクリスマスが広まったのは、19世紀になってからである。これは、「家族」の関係システムが、それまでの「全き家」と言われる大所帯家族から、市民的小家族に縮小されたことと関係する。これは産業革命の影響が大きい。それまでは生産の場と住まいが同じだったが、大きな機械を要する生産方式によって、労働領域と居住領域が区別されるようになったのである。「全き家」は徐々に崩壊し、家族の単位は縮小される。やがて家族は、人を社会的文化的存在へと教育する場へと変化し、礼儀正しい、よく躾られた子供を育てるといった関心を共有することになる。家族の概念が変化し、子供を良き市民に導くことに関心が置かれ始めたことは、家庭におけるクリスマスの儀式を発展させることに役立った。「大人は子供をよく躾なければならない」という考えは、「良い子であれば、プレゼントがもらえる」というクリスマスの風習と一致した。このような歴史的背景の中で、クリスマスは文学の中に取り込まれていったのである。

5. ゲーテとクリスマス

ゲーテは1772年、12月25日に朝の光の中で、過ぎ去った日々の快い記憶に呼び覚まされながら、友人のケストナーに宛てて手紙を書いている。その中でゲーテは、クリスマスがいかに素晴らしいか、自分がどれほどこの時期を愛している

かを詩情豊かにつづっている。^⑧ この時期に皆が歌う歌や、突然やってくる寒さも、全てゲーテには好ましかったようだ。

ツリーを囲んで家族と祝うクリスマスのセレモニーが広まったのは、19世紀に入ってからである。それも貴族や少数の富裕な市民層に限られていたというのは先述したとおりである。『若きヴェルターへの悩み』が出版されたのは1774年であり、まだ18世紀後半だった。つまりゲーテは非常に早い段階で、やがて世界に広まるツリーを作品に記していたと言えよう。

ゲーテ自身の体験した幼少のクリスマスに関しては、ゲーテの自伝的作品である『詩と真実』に詳しく記されている。それは、幼い頃に祖母がクリスマスの夜見せてくれた人形劇についてのことである。^⑨

祖母はあるクリスマスの晩に、これまでのあらゆる親切な行為の中でも一番のことをしてくれた。私たちに人形劇を上演させ、そうしてこの古い家に新しい世界を創り出してくれたのである。この予想もしなかった劇は、幼い私たちの心を強く引き付けた。とりわけ、私は強烈な印象を受け、長きにわたって大きな影響を与えられた。^⑩

幼少期のクリスマスの印象が後々まで影響を及ぼすことに関しては、シュティフターの『水晶』の冒頭を思い起こさせよう。シュトルムの『マルテと時計』における老女の思い出や、マンの『ブッデンブローク家の人びと』におけるアントーニエの幼少期の思い出にもつながるだろう。

ゲーテのクリスマスに寄せる好意的な態度は、幼少の体験が原点と思われる。比較的裕福な家庭に育ったゲーテは、幼少時代に幸福なクリスマスを経験しているようだ。

ただし、『詩と真実』の幼少体験の中にクリスマスツリーの記述はない。実際にゲーテ自身が幼少の頃、クリスマスツリーを飾る習慣は、故郷のフランクフルトにはまだなかった。しかしながら、1767年頃には、ライプツィヒの学生時代に知り合ったニュルンベルク出身の銅版画家の家に飾り付けられたクリスマスツリーを目にしていたようだ。シュトラースブルクの影響も大きい。先述したように、アルザス地方では、もみの木がクリスマス用の部屋の飾りとして、既に17世紀半ばには広く知られていた。ゲーテは、1770年の春から71年の8月まで、シュトラースブルク大学に通っている。

クリスマスに関する記述は『イタリア紀行』にも見られる。サン・ピエトロ教会で目にした華麗で荘厳なクリスマスの大法会に戸惑いを感じていることが記されている。自分はプロテスタント的ディオニソス主義であるため、その壮麗さは与えるよりも奪うところが多いという。^⑪ カトリック教会の行うクリスマスに対しては違和感を覚えていたようだ。

幸福な幼少期を過ごしたゲーテにとって、クリスマスは楽しい思い出となった。ゲーテは、学生時代に目にしたクリスマスツリーを、きらきらとした明るいもの、幸福な幼少期を象徴するものとして文学に取り込んだ。そうした作品におけ

る効果は、19世紀の作家に引き継がれる。彼らはクリスマスを描くことによって、その後の不幸を強調したり、明るいくクリスマスの背景に潜む社会問題を浮き彫りにしたりした。ろうそくを灯したクリスマスツリーや香辛料の効いたお菓子や贈り物など、クリスマスの光景は明るくきらびやかである。そこには幸福な子供たちのイメージが伴う。それゆえ、文学にクリスマスを描くことは、これと対象をなす暗部を浮き立たせるための仕掛けでもあったのである。

註

① 手塚富雄訳：『水晶』（岩波文庫）2002、8-9頁。

② 前川道介訳：『人形』（国書刊行会）1997、16-17頁。

③ Vgl. *Weihnachten bei der Familie Goethe*. Hrsg. von Geld J. Grein. Husum 2003, S. 55f.

④ Storm, Theodor: *Die alte Uhr*. In: *Weihnachten mit Storm*. Hrsg. von Antje Erdmann-Degenhardt. Berlin 2004, S. 42.

⑤ 望月市恵訳：『ブッデンブローク家の人びと』（岩波文庫）1969、125-126頁。

⑥ 『若きヴェルターへの悩み』からの引用は、次の版による。

Goethe, Johann Wolfgang: *Die Leiden des jungen Werthers (Fassung B, 1787)*. In: ders.: *Sämtliche Werke*. Hrsg. von Waltraud Wiethölter, Bd. 8. Frankfurt a. M. 1994. 引用の際は、引用文末尾の括弧内に頁数のみを記す。

⑦ ヴェルターの内面描写に関しては、以下の拙論を参照。

木田綾子：内なる自然の現れ—ゲーテの『若きヴェルターへの悩み』について— [『九州大学ドイツ文学会』第22号、2012、23-41頁]。

⑧ Goethe, Johann Wolfgang: *An Johann Christian Kestner*. In: *Weihnachten mit Goethe*. Hrsg. von Jens Dittmar. Berlin. 2002, S. 8.

⑨ クリスマスの人形劇の思い出は、ゲーテの代表作であり、教養小説の祖とも言われる『ヴィルヘルム・マイスターの修業時代』に使われている。

⑩ Goethe, Johann Wolfgang: *Dichtung und Wahrheit aus meinem Leben*. In: ders.: *Werke*. Bd. 9. Hrsg. von Erich Trunz, Hamburgerausgabe 1994, S. 15.

⑪ Goethe, Johann Wolfgang: *Italianische Reise*. In: ders.: *Werke*. Bd. 11. Hrsg. von Erich Trunz, Hamburgerausgabe 1994, S. 411.

参考文献

- [1] ジェリー・ボウラー（中尾節子他監修）：クリスマス百科事典（終風社）2007。
- [2] ジュディス・フランダース（伊藤はるみ訳）：クリスマスの歴史（原書房）2018。
- [3] オスカー・クルマン（土岐健治訳、湯川郁子訳）：クリスマスの起源（教文館）1996。
- [4] I. ヴェーバー＝ケラーマン（鳥光美緒子訳）：ドイツの家族—古代ゲルマンから現代（勁草書房）1991。
- [5] W. H. ブリュフォード（上西川原章訳）：十八世紀のドイツ—ゲーテ時代の社会的背景（三修社）1974。
- [6] *Weihnachten bei der Familie Goethe*. a. a. O.
- [7] *Weihnachten mit Storm*. a. a. O.